

## 『たそがれ』

涼しい電車内から灼熱ともいえる外へ足を踏み出す。夕方とはいえ、まだまだじんわりとした熱気が体を包む。八月二十八日、高校最後の夏も、部活に捧げてしまったと電車に揺られながらぼんやりと考えていた。

高校最後で、更に今年は『平成最後』という言葉にクラスメイトは楽しげだった。

部活終わり、四時五十分着のこの電車に、僕は毎日執着するかのように決まって乗っている。

最寄りの駅を出ると「よっ」と短く声を掛けられ、振り返った。いつものように駅舎にもたれかかっている青年は僕の幼馴染であり、もう十年前に事故でこの世を去った親友だ。

彼は死んだ。本来居るはずのない存在である彼は、幽霊だ。

僕には何故か彼が亡くなったすぐ後から見えており、当時のやけに肝が据わっていた僕は、幽霊として再び僕の前に現れた親友に、純粹に喜んでいて。そこからもう十年、彼はずっと僕の前に現れ続けている。ずっと、とはいっても四六時中僕の前に居るというわけではなく、決まって午後四時五十分頃から五時を告げる『赤トンボ』のチャイムが流れ終わるまでだった。

そこまでは、普通の幽霊ならあるのかもしれない事柄なのだが。彼が変わっていたのは彼が霊でありながら成長する、という点だった。彼は十年の間に僕と同じように身長が伸び、体つきもしっかりしていった。身長に関しては生きている僕を越えてしまうくらいだ。そのことについて彼に聞いた事があった。しかし返答は期待していたものではなかった。

「それはおれにもわかんないや。それより竜ちゃんの方が自分の身長気にした方がいいんじゃない？」

このように、はぐらかされてしまった。彼は昔から話をさりげなく逸らし、はぐらかす事がうまかった気がするが、それが生前からそうだったのかはもう覚えていない。

そう、もう覚えていない。綺麗さっぱりこの世から居なくなってしまうのなら、もっと色々な事を忘れてしまったかもしれないが。

でも、そうであったなら僕の幼いころの生きていた彼との記憶は死後の彼との記憶に上書きされてしまう事もなかっただろう。もう、この世から居なくなってしまうひとの思い出が、そのひとが幽霊になってからの思い出のほうが多いのはなんとも奇妙で、少しだけ寂しいと僕は感じている。

小さいころ友達もあまりいなかった自分はよくあっちゃん、と彼のあだ名を呼びながら彼について行っていた。あだ名で呼ぶ習慣はいまでも変わっていない。彼は確かに僕と十年の歳月を過ごしているし、いずれ彼が消えてしまうその日まで、この関係は変わらないだろう。

しかし、彼が普通の幽霊と同じように未練を解決することによって成仏できるとして、その未練の原因が僕だったとしたら、僕は彼が成仏するために全力で協力することができないような気がしていた。僕は、やっぱりどこか彼に依存しているようで、彼が消えてしまうのが怖いのだ。

僕は、彼が死んでしまっても何年も経った今でも彼に、さよならが言えない。その代わりに、おまじないのように「また明日」と呟いている。

今日も、あと少しで夏休みが終わるけど宿題が終わっていないだとか、夏らしいことを一切していないだとか愚痴のようにこぼしながら、彼は黙って僕の顔を見て話を静かに聴いていた。いつもなら、色々と茶々を入れてくるものなのに。それがなんだか気味が悪くて嫌な感じがした。

「なあ、何で今日は聞いているだけなんだ？」

「いつもそんなもんだろ？俺は話すことが特にないし。竜ちゃんの学校とかの話聞いて俺も竜ちゃんとの高校生活謳歌してる風になりたいだけだし」

なんて、不満げに口を尖らせながら言う。

「もう、高校最後の夏じゃん」

つぶやく様にぼつりとこぼす。聞き飽きていた、高校最後の夏という言葉がなんだか引っかかって隣の彼の顔を覗こうとした瞬間、赤とんぼが流れ始めた。今日のタイムリミットだった。

「また、明日」

少しためらいがちに呟く。チャイムの残響が消えた瞬間、彼の姿も消えていった。

家に帰っても先ほどのことが引っかかっていた。あんなふうに彼が夏の終わりを気にしたことは今までになかった。

「なあ母さん。高校最後の夏とかってそんなに特別？」

「どうしたの急に。うーん、私の場合は特別だったかなあ。大学も青春のうちに入るちゃあ入るけど、やっぱり高校まで、高校が一番青春だったなあと思うかな」

「ふーん、そっか」

「そういえば、昔アスカくんが竜と絶対一緒の高校に入って青春過ごすんだ、なんていってたわね」

思いがけないところで、あっちゃんの名前が出てきた。そんなことを、言っていたのは遥か昔だ。少し驚いていると

「もう、十年になるけど竜があっちゃんほど仲良かったお友達、いないなって思っちゃうの。青春って聞いて、思い出しちゃった。嫌だったらごめんね」

「ううん、大丈夫。僕もそう思ってるから」

母さんの言うとおりであった。僕は彼以上の友達はいないと、今でも思っている。友達はいても、あんな風に何でも話せる、という友達は出来なかった。もしかすると必要ないとすら心の中で思っていたかもしれない。彼をこの世に引き止めてしまっているのはそういった自分の心も関係しているかもしれない。そう心の中で呟いた。

「そういえば、明日で十一年になるのね」

「……そうだね」

忘れられないあの日がまたやってくる。

「ごめん、もう寝る」

「そう、おやすみ」

おやすみ、と短く告げる。振り返らないまま自分の部屋に入り、ベッドに寝転がった。ベッド横の窓の前にある二人でよく見ていたヒーローのおもちゃのロボットと目があった。今でもヒーローものはなんとなく、ずっと見続けてしまっている。あの頃見ていたヒーローのおもちゃを捨てることが出来ないのも同じような理由だ。そのままベッドに寝転がりながら悶々と思い浮かんでくる疑問の答えを探す。ぼんやりとだが、終わりが近づいているのだろう。あのあっちゃんの様子は、何か言いたくない事や言い辛いことを隠しているときと似ていた。最後と気にしていたこともある。覚悟を、もう決めなきゃいけない。そう思いながら眠りについた。

翌朝、今日はたまたま何も用事がなかった。だから、と言うわけでもないが小学校のころに通っていた通学路だったり、公園だったりを見てまわる。あの住宅展示場では時々ヒーローショーをやっていた。今もそうなんだろう。あっちゃんとは幼稚園で出会った。近所に住んでいて、同じヒーローが好きだったことがきっかけだったと思う。元気で良い子なあっちゃんは人気者だったと思う。幼いながらにこういう子がヒーローになるんだろうなと思っていたのを覚えている。彼の事故も、そうだった。彼は、僕の憧れのままでいなくなってしまった。夏の終わりは、彼と一緒に連れ去ってしまったように思う。ずっと、そう思っていた、だけど口に出さなかった。

もうすぐ、いつもの時間になる。少しだけ、夕暮れが早くなっていることに、夏の終わりを感じる。時計を見ながら、小さくカウントダウンする。さん、に、いち。

「あっちゃん」

「うん、遅めのおはよう」

やっぱり、なんだか気まずそうな様子だ。

「今日で、もう会えないんだろ？」

ビクビクしたように俯きがちだった顔を上げる。やっぱり、彼はわかりやすい。

「やっぱ、バレた？本当は、最期ってあえて言わずにバイバイしようとしてただけだなあ」

そう言いながら、悲しそうに笑った。

「今日、言いたいことちゃんと言おうと思うんだよ、僕」

「うん、そっか」

「僕はなんであっちゃんが僕だけの前に現れるのか分からない。だけど、こうやってあえて一緒に帰れるのは嬉しかった。一緒に高校通ってるみたいで。忘れてたけど、一緒に高校通うの、夢だったもんな」

「忘れちゃうとか、ひでえなあ。うん、そうだよ。おれ、高校に竜ちゃんに通うの夢だったんだよ」

そう、泣きそうな顔で笑った。

「泣いたって良いよ、僕たちのヒーローだってつらい時、悲しいときは泣いてたじゃん……別れのときも」

目頭の方が少しだけ、熱くなってきた。

「僕、あっちゃんの事ずっとヒーローみたいだっと思ってたよ、あとヒーローであろうとしてたことも。最期まで、カッコよかった。でも、なんでいなくなっちゃったんだよ」

耐え切れずに、涙がこぼれる。

「だよな、何でだろうな。生きてたら、もっと色々なこと出来たのになあ」

そう言いながら、彼の声はどんどん震えていた。

「おれ、どうしてもお前と高校生になりたかったんだ。あのヒーローも、高校生だったじゃんか。そんで、竜ちゃんとならヒーローになれるって思ってたんだ。そしたら、幽霊になっちゃったみたい。あの番組、ヒーローの二人が学校から帰るシーンで絶対終わってたから、あんな風に帰りたいかったんだと思う」

涙交じりの鼻声で細々と告げられる。

「僕だって、そうだったよ。なれそうだって思ってた。今でも信じてる。僕の一番の友達是一生あっちゃんだし」

「なんでそれが理由になるんだよ」

泣き顔が、笑顔に変わった。その顔を見て安心する。

「泣いても良いけど、やっぱヒーローは笑顔が一番だよ」

「おれも、そう思う。あーあ、もう終わりになっちゃうんだなあ」

「今度こそ、本当にお別れだな」

「寂しくなること言うなよ。そういや、なんで成長してんのかって聞いたことあったけどこれ、多分理想の成長姿だったんだと思う。まあわかんないけどな！」

そう声をあげて笑った。その横顔と声が、かつての彼に重なった。

「でも、なんかまた会えちゃいそうな気がする」

「おれもそんな気がする。さ、もう時間だ」

彼が言った瞬間、チャイムが鳴り始めた。

「バイバイ、だと一生のお別れみたいな感じが強いなあ」

最期の最期までのんきなものだ。それが彼という人なのだが。

「じゃあ、また。いつかどこかで逢いたいな」

そう言うと彼は笑う。

「逢いたいな、じゃなくて逢おうだろ！こういう時は」

そのまま、静かに微笑んで彼は背中を向けて歩きだした。僕も、背中を向けて歩き出す。チャイムが鳴り止む。歩みを止めて、振り返る。

もう、彼の姿は見えない。

その日以降、やはりもう彼の姿を見ることは無かった。もしかするとあれは『誰そ彼』ともいわれるあの時間がみせた幻、夢だったのかもしれない。

あれから数年後、僕はあまりヒーローものを見なくなった。適当につけたテレビにたまたま映っていたヒーロー番組の主人公の名前が『アスカ』だった。その主人公の俳優の顔が少し彼の理想の成長後の姿に似ている。

「あいつ、このこと言ってたのかなあ……」

ふ、と笑う。なんとなく、彼らしい。あの日以来終わってしまったと思っていた彼の物語が、再び動き出した気がした。